

コロナ禍での子どもの育ち ～いま私たちにできること～

1月29日（土）田中哲さん
 （児童精神科医・子どもと家族のメンタルクリニックやまねこ院長）を講師に、講演会とおしゃべり会を行いました。

秋に続き2度目のオンライン講演会となりました。期間限定のアーカイブ配信も含め多くの方に参加、視聴していただきました。（当日参加講演会 99名　おしゃべり会37名）



「コロナがあんな状況になっていることで、自分で発信をしないといけないと思われられている」と、心境を語られ講演は始まりました。そして、コロナ禍で

子どもたちは、3つの不安を解消しようと「幼児化」している。子どもたちの生活は、直接交流を基盤としたコミュニケーションによって大きく支えられているとして、子どもの育ちの支えと心の問題を図によって示されました。今の状況を希望的に考えるために

「昭和20年に何歳だったかが戦争の影響を考える上で大事なのと同じように、コロナ元年は何歳だったかの影響は大きい。この時代の中ソーシャルコミュニケーションを学ぶ方法を考え、学校と家庭にリスクが集中することを避けるための居場所の多様化が必要です。」歴史の当事者としてどういう振舞いをしたのかは歴史に残る。そんな歴史の転換点にいることを子ども達と一緒にしていくと希望的に考えられる、そして不寛容にならな

いことが大切です。」最後に、子どもたちを粹づけするのではなく、子どものビーイング（自尊心）を良い状態に維持する一こと、その子の「らしさ」を支援するウエル・ビーイングについて話をされました。後半のおしゃべり会では、7つのグループに分かれて感想など出しあった後、田中さんを交え質疑応答の時間を持ちました。一人ひとりの質問に共感しながら答えてくださいました。

企画にあたり、運営委員会では田中哲さんの著書「『育つ』こと『育てる』こと　子どもの心の寄りそって」を輪読。「自立の本質とは『自分であることを引き受けられる』ことです。」など、いくつもの言葉に考え方を深め合いました。
 実行委員長は、中部教育を考える会代表の檜和田美樹さんが務めました。

分身ロボット「OriHime(オリヒメ)」開発者
吉藤オリィさん
 開催決定！オンライン講演会
 2022年9月19日(月)・祝13時

ふくおか教育を考える会協議会

ニュース	
No. 162	2022年3月30日
400部発行	
電話	
協議会	406-4125
東部	608-0960
西部	090-8228-3074
南部	542-3578
中部	522-4545
ちくし	080-1728-7178
宗畠	0940-34-3087
〒815-0037	

福岡市南区玉川町
 12-22-505
 f-kyoiku@helen.ocn.ne.jp
<http://fkyoikuco.wix.com/fkyoiku>

「コロナ禍での子どものそだち」

「いま私たちにできること」

子どもと家族のメンタルクリニック

やまねこ 院長 田中 哲さん

うと思います。

■戦う相手が見えないことの不安

いつも考えていることがあります。コロナがあんな状況になつていて、余計何とか自分で発信をしないといけないということを思われています。子どもの成長を守るために私たちにできる」ことを考えていました。

■安定した日常が見えない不安

コロナが始まつて概して子どもたちは、意外と元気だったのです。ただそれが1ヶ月、2ヶ月と過ぎてくると、だんだん子どもたちの様子が変わつてくることに気がつきました。

毎朝お母さんが起きてくれてご飯があつて学校に行けてという形で、毎日暮らしているつていうことの確かさがある。いつも自分のことを大事してくれる友達とか、家族だとかも居るつてことを、その日常生活の中で確認していたのです。けれどもそれが急に見えなくなつたのです。そのことの不安があつたのだろう

もう一つは、いつ終わるかわからない。1年半以上経つた今でも全く終わっていない。そういうよくわからない状態になると、子どもにとつては災害みたいなものです。普通はそういう時、大人が当てになるのです。でも大人もコロナが怖いし何をしていいかわからない。いつもなら当てになる大人がさっぱり当てにならなければいけない状況があつた。こういう中で、不安が高まる」ということが多く起きていました。

■いつ終わるのかわからない不安

もう一つは、いつ終わるかわからない。1年半以上経つた今でも全く終わっていない。そういうよくわからない状態になると、子どもにとつては災害みたいなものです。普通はそういう

子どもたちが、成長をしていくベースつていう環境そのものが変わつた。変わつたことで成長の様子が少し変わってきてしまつていると、いつも大人が当てになるのです。でも大人もコロナが怖いし何をしていいかわからない。いつもなら当てになる大人がさっぱり当てにならなければいけない状況があつた。こういう中で、不安が高まる」ということが多く起きていました。

コロナの不安つていうのは子どもにとって急な時期の症状で、それが少し長期化した時の問題として考えてみたいと思います。

2、子どもたちとコロナ禍の下での学校生活

コロナ禍の学校の環境にどんな変化があつたかということです。3ヶ月に及ぶ学校閉鎖があつたのです。

■不安を解消しようとしての幼稚園化

お子さんで、それまでやらなかつたような

とをやり出す、いつもと違う、少し様子が違つていうことに気がつかれた方いらつしやいますか？

少しだけ子どもたち全体が赤ちゃん返りしたのです。普通にできていたことができなくなつたのです。お母さんに少しベタバタする、ちいさい子どもと喧嘩するなど。つまり幼稚園化が起こります。子どもにとって、日常が確かめられなくなつた時に何を当てにするのかというと自分が一番頼りにしている大人との関係に戻ろうとしていたのではないか。そうすると大人の目にはちょっと幼稚園化したように見える。

子どもたちが、成長をしていくベースつていう環境そのものが変わつた。変わつたことで成長の様子が少し変わってきてしまつていると、いつも大人が当てになるのです。でも大人もコロナが怖いし何をしていいかわからない。いつもなら当てになる大人がさっぱり当てにならなければいけない状況があつた。こういう中で、不安が高まる」ということが多く起きていました。

■これまでの行動制限

学校が開いた後、子どもたちがとても、樂しみだつた学習、行事、校外学習、運動会、発表会、部活に制限がかかるてほとんどできなくなつた。子どもたちにとって学校という一緒にいろいろなものを作り上げて楽しいという要素が、それだけ大きく減つたのです。

家に籠る、ネット漬けになる子どもたちが多く出てきましたし、運動不足が軒並み子どもたちの大きな問題になつていきました。

閉鎖が解けて病院に子どもたちがやつてきたときに、担当の先生だけでなく、例えば保健の先生なんかが気がついたことは「運動能力が落ちた」、あるいは「体重が増えた」ということでした。保健室にはそれまで、「」なんどで怪我しないのに」みたいなことでやつてくる子どもがすごく増えたのです。

■ワクチン、感染による気遣い、差別

ワクチン接種が始まつて、社会的な気遣いが広がりました。「あの人はワクチン打つた」「僕も打つた」みたいなことをあまり胸張つて言えるような状況じやなかつた。ちよつと申し訳ないような感じ。近くで感染が起きた、知つている人がコロナになつたみたいことがあると、

どういうふうに言つていいのか神経質になります。だから、他の感染症と大きく違つて、感染したことがなかなか自分のこととして語れない状況でした。

一部では感染をしたという事にちょっと差別的なことを言われ、あるいは医療関係者の子どもが、「お前のとこのお母さん、看護師さんでコロナのどこで働いているのだつて?」といふことがある。子どもたちがいじめ今までいかくなつていた。

■ICTの急速な導入

ICT×GIGAスクール構想の3年4年かけて進むはずだったタブレットの普及つていうのが、すごい勢いで、一斉に整備されて子どもたちに配布されたということがありました。公教育の環境を大きく変えてしまつたということがあります。タブレット持つだけなら、いろんな形で子どもたちは電子機器にはすつかりおなじみで、むしろ子どもたちの方がICTに慣れるのは早かつたのです。大人の方はちよつと遅れていた。だから今でも先生たちの方がはるかに使い慣れていないみたいな状況があります。

■安全に凝集できない子ども集団

子どもたちは、集まつてワイワイやって、いろんな知識を共有し合つて、冒險をし合つて、賢くなつて大きくなつていく。子ども集団から初めて生まれる自尊感。子どもたちが子どもと

そうすると教師・生徒関係も質的に変わりますし、子どもが学ぶつていう形そのものが変わりました。その変化そのものは、ICTという形で国が画策してたことではあるのですけども、準備がないままに、性急に進められた。もちろんそのことで、ICTを使える家、あまり使えない家の格差が大きくなつていくということが見えました。

■信頼できる情報の不足

コロナ感染症に関する信頼できる情報というのが不足しています。どんどん新しい株が出る。それってどういうことだ? ワクチンは効くのだろうか? 子どもにはどのくらい心配だろうか? 新しい株つて、何を心配しなきやいけないの? とか、ちゃんと信頼できる情報が子ども達のところに届いてなくて、言われるままに対策をしても、自分の目で「コロナつて何だらう?」っていうことを見たり、考えたり、知つたりする機会がすごく制限されていました。

して輝いている、そういう状況が生まれるのであります。

コロナは、こういったことの全てに、制約をしていったのです。

このことは、もともと少しハンディを背負い、配慮を必要とする子どもたちが、集団化する」とがどんどん難しくなっていきました。学校封鎖後もう一度学校が始まると、学校というところは以前にも増してすごく閉鎖されて窮屈で楽しみが少なくて、子どもたちにとって魅力が少ないものになつていつたということがあります。これはもともと工夫しなきやいけない部分です。

3、子どもたちの育ちの環境はどう変化したか

■直接の対面接觸を回避する対人交流

まず直接の対面接觸を回避するセルフ・ライフスタイルが大きくなつていったということです。他人との距離感を少し多めにとつて個人化するっていうライフスタイルそのものは、別にコロナで始まつたことじゃないのです。ライフスタイルが近代化していく。そうすると個々人の個人的な生活様式を大事にしようとする。それはたとえばプライバシーの重視だとか個

人情報の保護だとかっていう、以前はあまりしなかつたことに配慮をするようになってくる。例えば学校の教育の中では、担任の先生が家庭訪問で家に上がつたりしないとか、PTAがつまらないとか、電話番号も共有しないとか、コロナの前から少しずつ進んできていたわけです。お隣同士でも基本的にお互いの生活のこと

はあまりオープンにしない、共有しないです。例えば町内会の共通の仕事に参加する人が減つていく。そういう中、協同性からみんなで集まってワイワイやることに人が集まりにくくなつていく。これは、たとえば宗教だとか、何かの勉強会みたいなのも同様です。人がまとまるつて動くことをしなくなつていくと、直接の交流を基盤にしたコミュニケーション機能が低下していくます。

■地域教育が育ててくれるものは子どもの社会性です

子どもたちがどうやって社会で生きていいくか、物事を取引するとか、人と友達になると、見ず知らずの人などいう振る舞いをするかというのは、社会の中で覚え、地域の中で体験していくはずだったのです。地域が関わるうにも関われなくなり、子どもにとつてはチャンスがなくなつていきました。

■家庭固有の問題が増幅

家庭の問題でいえば、家族は感染に関しては運命共同体です。それを引き受けているから、初めて家族っていうのは成り立つ。それが家族の基盤です。

例えばお父さんがリモートでずっと家にいる。子どもは遊びに行けないから家にいる。そうするといつもだつたら気にならないことが、気になる。いつもお父さんがいるみたいないと

どもと同じように叱るようなことも、だんだんしなくなっています。本来、そういう中で子どもが体験して、社会化していくことを覚えていた。時代とともに、地域の教育力で子どもと一緒に育っていくことが、少なくなつていついていたけども、そのことをコロナがガンつて後押しした感じです。

になってしまふ。やりにくいです。ほんの少しの距離。子どもたちは学校や学童に行き、友達と遊びに行く。父さんは仕事に行くことでバランスが取れていた。情緒的な環境が維持しにくくなつていく。家庭は過密なのです。

感染に対する判断が家庭によつて格差が生じる。家庭によつて全然考え方が違うのです。しかもその家庭同士のやりとりつていうのは、すごく制限されるので、それが、まともにその家庭の格差になる。

同世代集団の中で個別性を確立するといふのは、家庭から同世代集団の中に出で行くことです。家を出て、やがては世の中に出て行くこととの第一歩を踏み出すわけです。家を離れて同世代の中で思いつきり自分を發揮する。時には、

家族の言うことよりも友達の言うことの方が大事になつてくる。

小学校に行くと、そういう集団が確立して、初めて子どもは家庭を離れる、家庭から巣立つことができるのです。

コロナ禍では子どもたちが家庭に拘束され、家庭から動けなくなる。学校には行くのだけれども、そこで深く付き合つたり、交わつたり、やり取りしたりといふことが大きく制限されていくことで、子どもたちの先へ進む社会性も制限される。社会に出て行くことができない

と、ずっと家中で足踏みしているしかないのです。

この2年間は、授業内容の制約、登校するとの制限があった。大学は、ほとんどオンライン授業です。もう年度がほとんど終わろうとしているけど、去年の春に入学したものの一回も大学には行つてない。だから友達とも一回も会つていなかうという大学生がたくさんいます。大学生だからオンラインかもしれないけれどもどうやって社会に出て行くことを選ぶのだろうか、人の間で上手にやつしていくことを学べるのだろうか。大きな環境の変化で、子ども達はすごく閉塞感を持つている。家庭も閉塞しているということだらうと思います。

■ フラストレーションが充満した状況

ウィルスがこれだけ流行つて経済がガタガタになつていくのを目の当たりにする。経済がこれからどう回つっていくのか、もうコロナ次第。こんな事はかつてなかつた。そういう中、大人

達にとつては、すごくフラストレーションが充満するでしようし、経済は大きな痛手です。グローバル社会は資本主義社会そのもので、経済が発展することが幸福なのだといふに議論の始めを置くわけです。「経済成長＝人間

の幸福」というふうに考へてゐる限り、幸福になりつこないです。儲かるつてこと以外の幸せのカタチを、提示できないフラストレーションがあります。仕事によつては、転職をしなきやいけないことになる。やつていけない保育園がいっぱい出でたりする。すると、保育園に子どもを預けている大人の仕事が回らない。大人の社会がコロナに翻弄されている。そういう社会を子どもはどう見ているのだろうか？

子どもは、割とシニカルです。それまで鬼滅の刃の話とか、ゲームの話しか乗つてこなかつた子ども達に、ふと「コロナはどうなると思う？」

つて聞くと意外にシニカルで現実的なことが返つてきます。「だって、先生、今の状況を見たつてそんな簡単に解決するはずないじやない。あと1年は続くよ」みたいなことを子どもは言います。大人の混乱を子どもはよく知つてゐると思います。

4、子どもの育ちの支えと心の問題

今のような状況と子どもの心の問題は、すごく深い関係にあります。

子どもたちの心が順調に育つ青信号があります。その青信号が上手に点つていくためには、

4つの要素があると私は常々考えています。

■子どもの発達の潜在性

これは直接コロナと関係なしに僕はいつも考えていることなのです。子どもの心が上手に育つために一番必要なのは、子どもの「発達の潜在力」です。子どもの心つてすごく高いボテンシャルを持つていて、子どもの発達の潜在力にピッククリさせられます。以前、あんなに周りを困らせ自分も困っていた子どもが、1、2ヶ月すると問題はなくなっていて、全然違う表情を見せてくれることがある。それってなんの要素かと言ふと、お薬が効いたとか親が工夫したとかじやなく、心のアンバランスを子どもの育ちが追い越していくのです。すると問題が解消していくことがあります。それをどう發揮できるかが育ちの鍵で、言つてみればロケットの推進力みたいなものです。

■家庭養育の心理的安定

ロケットって何本かのブースターを束ねて

一本のロケットにするのですが、バランスよく推進力が揃つていればまっすぐ飛んで行く。推進力の高いロケットを持っていても、発射台がしっかりとないと飛んでいかないので。発射台は何かと言ふと、家庭です。基礎をしつかり

置いた上にやぐらを立てて、必要なものを全部組み上げて、全部のものを注入し、時には人も乗り込んでカウントダウンして、「それ行け」っていう、これが発射台です。だから、家庭がどれだけ安定し、いろんなものを供給してくれるのかということが、子どもの育ちがどうスターするのかに関係している。

■子ども集団の自尊感（自己受容性）

ロケットがどこに向かって飛んでいくかです。それが人工衛星なのか、惑星探査機なのか、火星ロケットなのかで違う。準備が全部違うし、機能も違う。それに相当するのが、「子ども集団の自尊感」。子どもたちが群れて遊んでいて、加えてもらいたい、あの遊びがやりたい、やっていることを僕も知りたいと思うことで、ボタンシャルを一番フルに發揮するのです。その子どもたちの集団が輝いていることがすごく大事。これが揃うと、子どもたちはロケットに火をつけてまっしぐらに成長していく。

■安定した養育環境

さらにそれを支えるものが、コミュニケーションです。応援団としての大人たちがいて、初めて、子どもたち集団が自尊感をもつ。自分たちが何かできるようになる、大きくなっていくのはいい

ことだと思えるようになる。それを支える人たちが必要です。

これは言わば、学校の先生とか地域とかに相当するのです。地域の人たちが子ども集団を子どもとして見てくれる。子どもの育ちが大事だと考えてくれるから、子どもたちの集団が大きくなっていく。同時にそのコミュニティーは家庭にも大きく影響しています。

例えばお母さん一人では絶対子どもを育てられない。人間の子育てというのは、それを預ける人がいること。実家のお母さんかもしれないし、近所のママ友かもしれないし、保育園かもしれない。いずれにせよ、誰かに預けることができて初めて子どもが育つていくし、家庭が安定していく。そういうやりとりがこのコミュニケーションと家庭の間にはあります。これが支えになって、初めてこの全体が成り立つのです。

■家庭養育の心理的不安定

ここに先ほどのコロナのネガティブな要素がかかるてくる。例えば、一緒にいる機会が少ないというのは、子どもたちが大きくなつていいこう、みんなの中に入つていいこうと思うプロセスを邪魔します。コミュニケーションが、学校の教育や子どもの育ちに関与できないということ

は、子どもたちが自尊感を持つことを難しくしてしまうのです。同じように、コミュニティーは家庭を支えることもできないから養育環境が閉塞していくし、そういう中で家庭がお互いに良い条件を作ることが難しくなる。

そうすると、この青信号だったものが赤信号になつて全部不安定になるのです。

いい循環をつくつていた要素が、一転してア

ンバランスになることで、悪循環の要素になつてしまふ。

■子どもの発達の不均衡

この悪循環が直接は目に見えません。でも、目に見える形があります。例えば、子どもの発達の不均衡。多少アンバランスがある子どもたちも、推進力で成長していくことで、アンバランスを乗り越えてバランスの良い子どもになり成長していくのです。

推進力が發揮させてもらえないような発射台の不備があると、子どもの発達が不均衡のまま残つてしまふ。そうすると、発達障害が増加したように見える。本来の発達障害というのはその子どものポテンシャルがアンバランスなのでうまく伸びられない。

同じような現象が、家庭が不安定でも起つて

ことがあります。性能のいいロケットだけれども発射台がしつかりしないから飛んで行けない事がある。あるいはがんばつて力を發揮したのだけれども、その力を發揮させてくれるような仲間がない。仲間に受け入れてもらえないときにアンバランスが起つる。すると結果的にはアンバランスな子どもが増えていく」とになります。

あるいは、そのアンバランスな子どもが、仲間集団に入つていこうと思うときに、壁がある。すごく高いハードルがあるということになります。バランスが取れないままの子どもは、みんなの中に入つていけないので。集団不適応とか不登校になつていくのですけども、その子どもにとって「みんな」っていうのが、自分がついていけそうな集団に思えないのです。ついで行きたいと思えるような集団に思えないときには、こういった問題が起きてくる。

■子ども集団の自尊感の低下

子どもが少し悪い子どもが自分の仲間集団の中に入つてこようとする時に、子どもたちが自尊感を持てないと、自分たちがもつと崩れる。その子どもたちを仲間に入れないという動きになる。そうすると、もつとバランスの悪い

子どもにとっては入りにくい集団になつてきます。それを積極的にやるといじめです。いじめは、自分たちはあいつみたいにウザクないから大丈夫だよねつて、ターゲットになる子どもを排斥する行動です。子どもたちの自尊感が低下している。自分たちがOKだつていう感じが持てないから、もっとダメなやつを見つけてラベリングすることで自分たちはOKだと思つたがる。そうするといじめが起き、子どもたちに傷つしが起つる。いじめられた子はすごく傷つくし、いじめている子も実は傷ついていて、いつ自分がいじめられる側になるかわからぬという状況。それが長く続けば子どものPTS Dが起きる。場合によつては子どもが自殺するみたいな事が起つる。

子どもは、すごく自尊感が傷つくから自殺してしまうのです。いじめが自殺の一一番大きな原因かと言つて違うのです。子どもの自殺統計では、実はいじめがトップじゃない。成績です。家庭で指導される、学校で指導される、成績が上がらないことを苦にして自殺する。子どもたちがいい成績を取らないと大人にならせてもらえないという状況。つまり、子どもたちを本當は支えて、「大丈夫だよ」って言つてあげるはずの大人たちが「良い成績取らないと大人に

なれないよ」って言っていることです。それは子どもたちにとってすごく矛盾している。

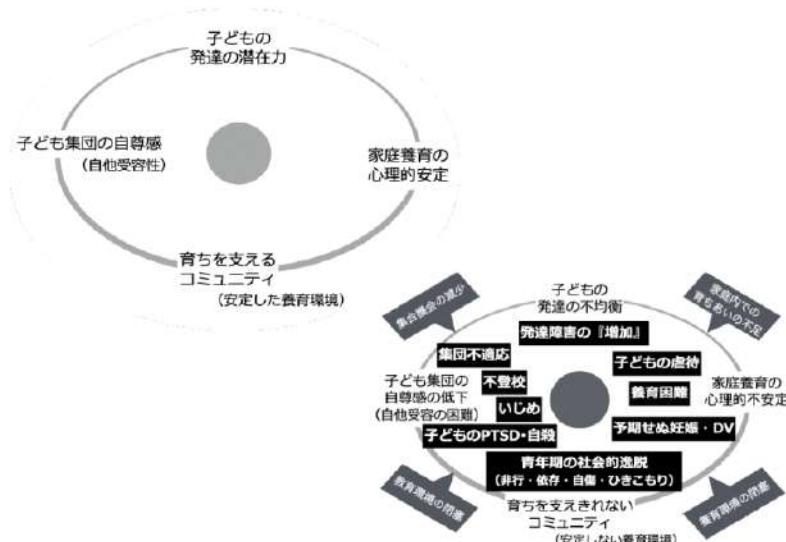
■青年期の社会的逸脱は子どもの抗議

青年期の社会的逸脱は、子どもたちの傷つきの表れだと言つてもいい。依存とか自傷、引きこもりなど、社会にうまく出ていけない、出でいく形が見つからぬ子どもの成長過程のつまずきの問題があります。

それでも年齢がくると社会に放り出されてしまう。二十歳過ぎたのに仕事してないのは「どういう理由なの?」と言われる。引きこもる辺なくて寂しくてしようがないからDVとか望まない妊娠とかに簡単につながります。しょうがないからと家庭を作る。でも子どもを育てられないです。大人になるまでの準備つてしまらないのです。大人になるまでに準備つてないわけですから。養育困難とか ネグレクトとか虐待という問題が起こる。虐待は家庭という安定した基盤が崩れているということです。虐待とまでいかなくとも子どもを育てるのに息詰まる家庭というのはいっぱいあります。

■子どもの育ちの支えと心の問題

○ 子どもの育ちの支えと心の問題



児童精神科やっているのですけれども、なんでも児童精神科がやることは減らないのだろうと いうことです。発達障害が増えている。いじめも不登校も増えている。自殺も増えているし自己傷行為、依存の問題も増えている。DVも増えているし言うまでもなく虐待も増えている。この「子どもの育ちの支えと心の問題」の図

5、子どもたちのメンタルヘルス維持のための課題

私たちは何を課題にして子どもたちに接し、サポートしていくといいか、3つのことを考えてみたいと思います。

2020年のコロナで大事なチャンスを何歳の時に失つていつたか、その子にとつては長期的な影響の問題なのです。そういうなかでどうやつたら希望を持ち、次の時代を構想できるか、その一つの提案とビーリングを良い状態にすることです。

① 環境被害の長期的影響を回避する

周りの目には見えない心の様子は、子どもたち側から出すサインなのです。私も40年近く

が出来上がった瞬間に「ああなるほどね」と思いました。減らないはずです。悪循環があり問題は根っこで繋がっているのです。その問題には実は誰も手をつけてないので。しかもその根っこにある問題を今回のコロナの状況が、グンと後押ししたのです。こういう状況の中にいる子どもたちにとつては育ちがなかなか保証してもらえない。そういう厳しいところに私たちはある。この中で子どもの育ちをどうやって保証しようかということを考えていただければと思います。

ーソナルなコミュニケーションを確立するのです。気心しかた、言わなくても分かる目配せとか、雰囲気で伝わるようなコミュニケーションをパーソナルなコミュニケーションといいます。でもそれだけでは世の中で生きていけない。自分のことを人に説明し、みんなに言われていることを自分のことだと理解する、ソーシャルコミュニケーションが必要です。

学校の環境が寸断されて、どんどんバーチャルなものに置き換わっていき、ソーシャルコミュニケーションを学ぶ方法がすごく減っているわけです。時にはケンカしながらそのケンカをどうやって仲直りするか仲裁するかとかいうことを繰り返しながら、子どもはソーシャルコミュニケーション（自分の言い分の伝え方、折り合いのつけ方）を学んでいくわけです。学力の保障だけではなく、ソーシャルコミュニケーションをこれから子どもたちにどうやって学ばせ、学んでいくかということを課題にする必要がある。

■居場所の多様化

今、学校と家庭にリスクが集中するという状況になっています。家庭は運命共同体です。学校も1回クラスターが起つたら避けようが

ない。クラス丸ごと濃厚感染にならざるを得ない。集中することを避けるためには、ちゃんと子どもに居場所をあげる必要がある。居場所っていうのは子どもたちがここに居たいと願つて安全に自分らしくそこに居られるところ。家にしろ、学校にしろ、「ここにいなきやダメです」と言われた瞬間に、居場所ではなくなるのです。もともと子どもたちは寄り道をしたり、どつかで群れたり遊びに行ったり自分で居場所を選ぶことで自分を確立していく。自分しさを作つていただけることを意識した多様な居場所、今の時代でいえば安全な居場所を提供することも必要です。

■大人になることに希望が持てる

子どもたちが大人の世界を少しシニカルに見ています。大人に元気がない、大人が今の問題に立ち向かっている姿を見せてあげないと、子どもたちが大人になつていくモデルを描けないので。大人になつていくつていいことだつて思ふことが必要です。

長期的に考える時、子どもたちが学ぶことや群れること、大人になつていくチャンスを奪わないこと、重大な悪影響がないことなどを工夫する必要があります。

■能動的・受容的に乗り切る

今のコロナの状況を全く能動的に乗り切れ

守ることばかりではなくて、少し攻めないとこの状況は乗り切れないでの新しい意味を見つけだしたいと思います。

■歴史の当事者性

今から100年後の人たちが、2020年に生きていた人たちを見たときには、私たちは歴史上の人物です。しかもコロナは歴史に残る事件です。この中でどういう振る舞いをしたかは歴史に残るのです。私たちは、その当事者です。新しい生き方なり、新しい問題の立て方なり、考え方という提示をすれば、後の人があの時代にこういうことを言つた人がいた」となるわけです。歴史の転換点に私たちはいるという意識を持つと、ちょっと違つてしまませんか？

■不寛容に陥らない

不寛容は自己肯定感が下がった事によつて他者を肯定できなくなつたことですから、不安の表現と考えられます。あえて今そういう時代に寛容さが足りなくなつてゐることを意識して、どうやつたら自分たちが寛容になれるかを考える。

てない。こういう中で、どうやって能動的、受容的になれるかを、考えてみると、いのではないか。よくコロナに負けないと、かつて言うけど、「コロナに負けないって、一体どういうことなのか」を示すことになるし、「ああ、大人ってすごいな」と思つてもう見えることになるのではないかと思うのです。

③子どものビーベイングを良い状態に維持する

ヒントになるのは、ビーベイングという考え方です。ビーベイングとは、要するにドゥーベイングの反対ですから、「いること」なんです。「する」と「じやなくて、「ふるいと」」。

■家庭機能を閉塞させない

元々家庭というのは、良いビーベイングを子どもに与える、つまり子どもを存在させることです。子どもにとって、いつも家庭は居てくれる人や場所があることです。

ビーベイング（自尊感）というのは、健康な家庭が子どもに継承していくものです。実はコミュニケーションも良いビーベイングを持つています。ということは、コミュニケーションの良いビーベイングを子どもに伝えていくということも繋がっています。ドゥーベイング（能動性）には、正しいドゥーベイング、間違ったドゥーベイングがあ

るのです。けれども、ビーベイングっていうのは、「その人がどういう風にいるか」とか「どんな人であるか」ということだから、間違ったビーベイングは見えないので、

私たちには、子どもたちに桦付をし、はみ出さないようになると指導する。これがドゥーベイングを桦にはめることです。ビーベイングは決して桦にはめることができない。子どもたちのビーベイングを、いつも良く感じられるようにしてあげることが、すごく大事です。

■子どもが能動的に関わる方法提供

子どもたちへのコロナ情報がすぐ限られている意味合いで、子どもコロナ情報センターやみたいのを作るといいのではないか。つまり、コロナという問題に子どもたちがアクティブに関われるようにしてあげるのです。それで初めて子どもたちが自分で「コロナを乗り切った」と思えるようになるのではないか。

そのためには子どもたちを取り巻く大人たちのビーベイングが、上手く子どもたちと向き合っていることと、コロナの問題に向き合っていることが必要だと思います。

ドゥーベイングもビーベイングも高い時は子どもたちも頑張っている。周りに働きかけて好奇

心丸出し、一番子どもらしいと思える。子ども自身も大人もこの状態の時の子どもを、一番子どもらしいと感じられる。ただ、子どもたちの心は常に動くのです。だから、ビーベイングが下がる時もある。子どもたちがやつてみたいと思うこと、好奇心を出すことって、半分くらいは大人がしてほしくないことなので、それが見つかると子どもたちのビーベイングが下がる。怒られた時は子どもたちがイライラしたり、反発したり、「だつて」と何かに責任転嫁したり、言い訳したりする。その言い訳も通用しない。「何度も言つたらわかるの」みたいな叱られ方で自分のビーベイングが傷つくと、いじけちゃう、諦める、すねる、孤立する、べそかく。その時の子どもは、ドゥーベイングが下がってしまう。

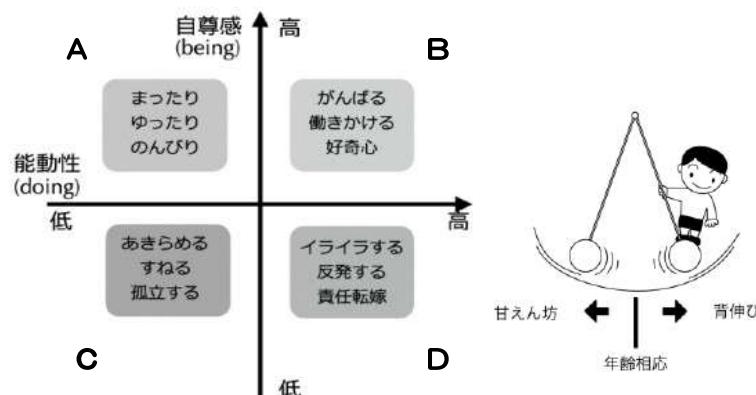
■ドゥーベイングの制限が

ビーベイング低下につながらないために

ビーベイングが下がらない状態というのがあります。例えば、子どもたちが、まつたり、ゆつたりしてゲームか何かやつてなかなか勉強しない。そういう時、大人はどうしますか。「そろそろ勉強したら?」って、プレッシャーをかける。ドゥーベイングが高い方に、プレッシャーかけるけれど、その時の子どもは、『子どもた

ちの Well・Being とは何か…』の、図D（右下）に来るのです。それは子どものビーベイングが傷つくから。子どもはよく言います。「お母さん」に言わると、それまでやろうと思つていたことをやりたくないなつちやう。」子どもの言い訳じやなくて、ビーベイングが下がるのです。指図されるの、嫌ですから。どういう気持ちかとか、その時のビーベイングを無視して、行動だけ指図されると、ビーベイングが下がる。その原理というのは、上から頭(?)なしに叱りつけることから起つてゐる訳です。

○ 子どもたちの well-being とは何か…



子どもの気持ちつて振り子みたいな所があつて、真ん中が年齢相応です。子どもの行動つて、年齢相応でやつてゐることつてあんまりなくて、半分は背伸びをしているか、半分は赤ちゃん返りをしている。能動的か受動的か、この間を常に揺れるのです。だから、それまでやれなかつたことをや

つてみたいと思う。小さな子どもはそうですが、一人で歩いて行くんだみたいに頑張る。でも次の瞬間に「もう歩けない、おんぶ!」とかつて言つて、甘えん坊になる。その子どもの能力としてできる、できないじやないのです。その時の気持ちの揺れです。これは常にあるつてことを考えましょう。例えば、頑張つていた子どもがいるけれども、頑張りが効かなくなると、僕らがイメージしてあげることが大事だと思います。

このコロナの状況の中で、子どもたちのビーベイングが軒並み下がつた。大人のビーベイングも下がつたのですが、子どもたちのビーベイングが下がく下がつた。維持できなくなつた。そのことにちゃんと関心を持つて大人が子どもに接しないと、のんびりしたり、ちょっと頑張つてみようと思うたり、能動性を發揮できるようにはならないのです。

僕らが引き続き考えたいのは、今の時代を経験した子どもたちが、これからどう育つていくのかということです。子どもたちが、新しい時代を創つていくなかで、酷い目に遭つたというだけではなく、ここを生き延びて、こんな知恵を持てたという、次の世代になつてくれる」とそろそろいいかなつ

て頃にちょっと頑張つてみようかなという気持ちになる。図のBに行かせようと思うために、上手くこの状態を作つてあげる。

● 講演会・おしゃべり会 アンケートより

* 子どもにとつて家庭でも学校でもない安心

して過ごせる居場所が必要だとわかりました。

* 大変納得感と気づきの多い講演をありがとうございます。私はいま小学5年生の発達障害の息子がおります。1年生・3年生で教室に入れず、母子別室登校をしました。4年生のコロナ休校明けから学校に行けなくなり、数ヶ月の不登校のあと、母子別室登校の期間を経て、現在は復学しております。この度の講演内容であるコロナ不安とそれに向き合った視点について、政策・社会現象・育ちの環境の変化などの大きな視座だけでなく、子どもの心の育ちを構成する要素やそれらの好循環・悪循環、そして Being・Doing のお話が、息子の不安感や、復学するようになつた過程などとリンクし過ぎて、もつと深くお話を聞きたいと思つています。

* 息子が自閉スペクトラム症の母です。まだ診断がつく前に、発達障害なのか環境がそつさせられるのか、自分がうまく育てられず息子に特性がでたのかずっと気になつていきました。お話を聞いて環境の大しさに気が付きました。子どもにとって安心な場所、作れるよう自分自身がまわりに地域に頼れるよう少しずつ頑張ろうと思いました。

* 振り子のお話がとても興味深く、自分でも思ひ当たり、もっと詳しく伺いたいなと思ひました。家庭の安心感を増すために、まず私が能動的になって、安心感を持とうと思ひます。

* 今、目の前で起つてある子どもの様子の背景がよく分かりました。イラストや動画で視覚的に理解出来たのも良かったです。また、理解を深めるため、再度講演会の動画を見て復習したいと思ひました。being は、一人で上げる」とは出来ない。コロナ禍だからこそ、大人が、かかわり合へることの大切さを語り合い、かわり合う場や体験を作つていかなければと思ひました。

* 子どもたちへ環境が関係し生きづらさを増している現状で環境が生む発達障害。その子らしさを維持する doing & being のバランスから生じる子どもたちが感じている生きづらさ、難しさなど、自分で確認できる部分や納得する部分などとも勉強になりました。

● 田中哲さん講演会を終えて

実行委員長 檜和田美樹（中部）

田中哲さんは初めての出会いでしたが、昨年の苦野一徳さん講演会でオンライン講演会も後日の YouTube 配信も経験済みでした。遠方からの参加や後日視聴が可能になり、オンラインでの可能性を感じています。コロナ禍の下での子どもたちというテーマのように、大人たちは「オンラインでの会議や講演会」というスキルを身に着けて、学びを止めずに活動しています。

内容は、コロナ禍での子どもたちの困難、そして成長するにつれての心の揺れ「doing と being」をやさしい言葉でお話いただきました。おしゃべり会でも丁寧にお話しされ、理解が深まりました。「愛着障害」についてもわらに田中さんから聴きたい! という声も出で、来年の講師としてお願ひしたいと思つています。

ます。短い時間でも、おしゃべり出来てよかったです。

* 肌で感じる感動のようなものは、リアル参加に比べて少ないと思いますが、アーカイブ視聴だと、メモを取り切れなくても何度も戻つて視聴でき、時間の制約が無いのも、助かりました。